

法然上人のご法語 第十九 乗仏本願

他力本願に乗ずるに二つあり。乗ぜざるに二つあり。

乗ぜざるに二つというは、一つには、罪を造るとき乗ぜず。その故は、「かくのごとく罪を造れば、念仏申すとも往生不定なり」と思うときに乗ぜず。

二つには、道心の発るとき乗ぜず。その故は、「同じく念仏申すとも、かくのごとく道心ありて申さんずる念仏にてこそ往生はせんずれ。無道心にては念仏すとも叶うべからず」と、道心を先として、本願を次に思うとき乗ぜざるなり。

次に、本願に乗ずるに二つの様というは、一つには罪造るとき乗ずるなり。その故は、「かくのごとく罪を造れば、決定して地獄に墮つべし。しかるに本願の名号を称うれば、決定往生せん事のうれしさよ」と悦ぶときに乗ずるなり。



永保2年（1082）、永観50歳のころである。2月15日払暁、永観は底冷えのするお堂で、ある時は正座し、ある時は阿弥陀像のまわりを念仏して行道していた。すると突然、須弥壇に安置してある阿弥陀像が壇を下りて永観を先導し行道をはじめられた。永観は驚き、呆然と立ちつくしたという。この時、阿弥陀は左肩越しに振り返り、「永観、おそし。」と声をかけられた。永観はその尊く慈悲深いお姿を後世に伝えたいと阿弥陀に願われ、阿弥陀如来像は今にその尊容を伝えると言われている。（永観堂ホームページより）

二つには、道心発るとき乗ずるなり。その故は、「この道心にて往生すべからず。これほどの道心は、無始よりこのかた発れども、いまだ生死しようじを離れず。故に、道心の有無を論ぜず、造罪の軽重きやうじゆうを言わず、ただ本願の名号を念々相続せん力によりてぞ、往生は遂ぐべき」と思うときに、他力本願に乗ずるなり。

「道心」

仏道を修行して覺りを開こう、という決意